

2018 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	准教授	浅野 和也
最終学歴	学 位	専門分野
中京大学大学院経営学研究科博士後期課程修了	博士	経営学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

学生の多面的な分析視角の形成・発達への積極的な支援

(計画)

学生からの質問・疑問に対して真摯に対応し学生だけでなく自己の成長につなげることを心がける。

○担当科目（前期・後期）

(前期) 人的資源管理論、企業研究、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期) 人材育成論、経営学Ⅱ、地域労働市場論、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

パワーポイントは使用せず、なるべく筆記をさせるようにした。同時に受講者に対して様々な角度から考えることの重要性を強調した。また、中間レポートを実施することで受講者の理解度の把握に努めた。出欠カードもただ学籍番号や氏名を書いてもらうだけではなく、自分にとって重要に思ったキーワードを3つ以上書くことを最低条件とし、さらに講義を通じて興味・関心を持たせたこと、学びが深まったこと、感想や質問などを書くように指導した。

○作成した教科書・教材

教材として毎回の講義用プリントを作成した。

○自己評価

非常に多くの学生がコメントを書くことが習慣化でき、アンケートでも「面白い講義」「わかりやすい」などのコメントを得られたので、経営学を通じて学生の興味・関心を高める効果を確認できたことから目標は達成できたと思われる。

II 研究活動

○研究課題

自動車産業における働き方の考察

○目標・計画

(目標)

これまで研究を進めてきた自動車産業の働き方を踏まえて、日本企業における働き方の実態を把握すること。

(計画)

継続可能な調査対象へのアプローチを積極的に行いながら、論文、学会発表等の機会を通じて研究成果を発信する。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・猿田正機編著、杉山 直・浅野和也・浅生卯一・宋 艶苓著『安倍政権下のトヨタ自動車』税務経理協会、2018年3月
- ・猿田正機編著、杉山 直・浅野和也・宋 艶苓・櫻井善行・張 永強著『トヨタの躍進と人事労務管理』税務経理協会、2016年3月
- ・猿田正機編著、杉山 直・浅野和也・宋 艶苓・櫻井善行著『逆流する日本資本主義とトヨタ』税務経理協会、2014年3月
- ・猿田正機編著、杉山 直・浅野和也・宋 艶苓・櫻井善行著『日本におけるトヨタ労働研究』文眞堂、2012年3月

(学術論文)

- ・浅野和也「トヨタにおける働き方の一考察」『中京企業研究』第36号、2014年12月
- ・浅野和也「自動車産業における働き方に関する一考察(2)」『東邦学誌』第41巻第1号、2012年6月
- ・浅野和也「自動車産業における働き方に関する一考察(1)」『東邦学誌』第40巻第1号、2011年6月

(学会発表)

- ・浅野和也「トヨタの『ダイバーシティ』推進」社会政策学会第135回大会、愛知学院大学、2017年10月
- ・浅野和也「合評会 十名直喜編著『地域創生の産業システム』水曜社、2015年」経済理論学会中部部会、2015年5月
- ・浅野和也「書評：猿田正機著『日本的労使関係と「福祉国家」—労務管理と労働政策を中心に—』(税務経理協会、2013年)をつうじて」社会政策学会東海部会、中京大学、2014年2月

(その他)

- ・浅野和也「トヨタ・ベトナム工場労働者の労働実態」『愛知労働問題研究所所報』第189号、2016年7月
- ・浅野和也「研究ノート 日本のワーク・ライフ・バランスは何をめざしているのか」『中京経営紀要』第23巻第1・2号、2014年3月
- ・浅野和也「労使関係と労働時間」労務理論学会編『経営労務事典』晃洋書房、2011年6月

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況(学内外)

- ・2013年度日本学術振興会科研費若手研究(B) 一不採択
- ・公益財団法人大幸財団 平成29年度 第6回人文・社会科学系学術研究助成一不採択

○所属学会

社会政策学会、労務理論学会、日本労務学会、労働社会学会、日本経営学会、北ヨーロッパ学会、過労死防止学会

○自己評価

本学の紀要への論文を執筆し投稿を試みたが、諸事情により取り下げることになったので次年度に投稿したい。また、大原社会問題研究所より原稿の依頼があり応諾、すでに脱稿している。出版は次年度になるが、歴史のある研究所からの依頼であり、自身の研究が学界にある程度認知されていると思われる。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

大学業務をつうじてさまざまな大学の問題や課題を進言し民主的な大学運営を実現する。

(計画)

大学業務をつうじて現状を把握し問題解決のための情報共有・意思決定の方策を考えて進言する。

○学内委員等

教務委員会委員、学術情報センター運営委員会委員、軟式野球部顧問

○自己評価

担当の委員会において学部の見解をふまえて業務に取り組んだ。教務委員では、RBの入学者が多いこともあり、時間割作成をはじめ各種調整に非常に手間取った。学部執行部に判断を求める案件が多く、意思決定、組織決定のルートがわかりにくいことから混乱することもあった。臨時で委員会が開催されることもあって多忙な1年であった。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

本学が実践できる社会貢献とは何かを理解する。

(計画)

本学が中長期的に社会や地域と連携していく上で必要なこととは何かを考える。

○学会活動等

労務理論学会幹事、社会政策学会秋季大会企画委員

○地域連携・社会貢献等

豊橋中央高校への出張講義

○自己評価

4年連続で同じ高校への出張講義を行った。就職希望生徒に対する社会の厳しさをテーマに実施し、先方からは「とてもよかったです」との言葉もいただいたので一定の評価得たと思われる。

V その他の特記事項(学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等)

昨年度末、授業実践の模範者として表彰されたことを受けて、授業公開および授業実践報告を行った。

VI 総括

研究活動では、これまで進めてきた自動車産業の労務管理および労使関係分析において、トヨタを事例に掘り下げた分析・考察ができた。論文を執筆したにもかかわらず、紀要への投稿が実現できなかったのが非常に残念であった。とはいえ、自身の研究テーマが学界で一定程度認知されていることも確認できたことから、ライフワークに位置づけられる研究テーマを扱っている自負を持てた。

11月に授業実践報告を行ったが、様々な理由があるにせよ学生から一定の評価を得ているにもかかわらず、報告の場ではネガティブな指摘が多かった。学生から評価を得ている以上、問題はない。引き続き努力する次第である。

学内業務では、教務委員会という非常に存在感のある委員会に配属されたことで、カリキュラムや単位認定等のしくみについて、いろいろと考えさせられることが多かった。教授会がなくなって以来、執行部に判断を任せる案件が非常に多いものの、すでに運営委員会で決まっている、学長会議で決まっている、理事会で決まっているなどの文言で下りてくるものが多い。執行部・科

目担当者・教務課との意見調整や確認などの「橋渡し」業務が非常に多く私自身混乱が生じた。
研究、学生対応などの時間は圧倒的に減少させられた。

以 上